

ロボスト農林水産工学国際連携研究教育拠点が「NoMaps 釧路・根室」に参加

ロボスト農林水産工学国際連携研究教育拠点は、9月11日（水）、釧路プリンスホテル会議場において開催された「NoMaps 釧路・根室」に参加した。

「NoMaps」は、北海道を舞台に新しい発想や技術によって、より良い未来を創ろうとする人々の交流を目的としたコンベンションである。今大会は、釧路・根室管内の基幹産業である水産・酪農・観光業と、最先端の工学・情報技術をつなぐ場を設け、大学研究機関、情報工学関連企業と地元起業のマッチングによる新技術の開発、新規事業の創出および地域基盤産業の強靱化とイノベーションを目的に、釧路で初めて開催されたものである。プログラムは、セッション1「観光業×テクノロジー」、セッション2「情報技術」、セッション3「水産・酪農業×テクノロジー」の3部に分かれ、当ロボスト拠点はセッション3を担当した。

まず、瀬戸口剛工学研究院長がモデレーターとしてセッション3の趣旨を説明した後、増田隆夫工学研究院教授が、「北海道大学ロボスト農林水産工学国際連携研究教育拠点の取り組み」と題して、当拠点事業の目的と組織・運営体制、活動実績について説明した。次に、田熊秀行工学研究院特任教授が、「北大ロボスト拠点研究シーズ」と題して、当拠点が手がける温室プロジェクトや、ロボスト農林水産工学研究開発プラットフォームの各分科会の代表的な研究シーズ、そして釧路・根室地域の農林水産業に関連する研究シーズを複数紹介した。続いて、岡本博史農学研究院准教授が、「ICTを活用したスマート農業 ～農業のロボット化と情報化～」という表題で、田植機の自動操舵や安全センサー、リモートセンシング技術について動画を交えて説明した。また、スマート農業の推進を目的とした、タイ王国との連携協定の活動にも触れた。最後に、和田雅昭公立ほこだて未来大学教授が、「2030年の水産業」と題して、情報処理技術を融合した新たな研究分野である「マリンIT」について、水産試験場や漁業者と一体で取り組んでいる持続可能な沿岸漁業の実践を紹介した。

今大会には、民間企業や行政機関などから234名が参加し、当ロボスト拠点が担当したセッション3の参加者は概ね50名であった。セッション終了後、多くの参加者が当研究会に入会を希望するなど、先端技術に対する地域の関心の高さが窺われた。

（工学研究院）